共立出版六十年史

共立出版六十年史

江苏工业学院图书馆
藏书章

共立出版六十年史

発　行　昭和61年6月22日
発行人　南條正男
印　刷　新日本印刷株式会社
製　本　株式会社　中條製本工場
発行所　共立出版株式会社
〒112 東京都文京区小日向4-6-19
電話　03(947)2511 代表
郵便振替　東京1-57035

〔非売品〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序にかえて

この社史は，私ども共立出版株式会社の創業（創立から昭和17年2月までは共立社と称していた）から，60年におよぶ出版活動の年次記録でございます．

当初この社史は，過ぐる50周年記念としてまとめるべく，かねてより準備をすすめておりましたが49年の夏に父，南條初五郎が急逝し，その後も諸々の用務やらなにやらに意外と手をとられてしまい，また刊行物の一覧表作製のための調査や資料集めに，予想外の時間がかかるなど，遂に50周年記念に間に合わすことができず，遅れ馳せながら60周年史として刊行することになりました．

出版社は，刊行した本がその社の歴史であり，また活動の軌跡そのものではなかろうかと思います．

創業以来の一冊，一冊は，昭和史とともに，それぞれの時代の科学・技術の進展に歩調をそろえて，今日の日本の興隆にいささかなりとも稗益するものがあったのではないかと，内々では自負するものがあります．

しかしこれはあくまで私の得手勝手な主観であって，個々の発行書の価値やその貢献度については，本来，読者諸賢あるいは社会からの評価に，俟つべきが至当であろうかと思われもします．

本史をまとめるに当たって考えたことは，尠なくとも自然科学方面の学術図書は，活字文化の代表として，また知識伝達の最終媒体として，なんとしても残さねばなりません．“言うは易く，行なうは難し”と申します．今後とも出版界にはいろいろなメディアが参入してくると思いますが，いずれにしても父が創りあげた共立出版㈱を，さらに社会に役立つ確固たるものに発展させてゆきたいと念じております．（なお各年次の社史にひき続いて，社会史，業界史等の事柄を断片的に記載いたしましたが，時代背景との脈絡にまで，ご高覧いただければ幸いでございます）

また社が今日ここまで育ってこられたのは，著述をいただいた数多くの先生方をはじめ，読者の皆様，さらには本造りに当たっての関連業社(者)の皆様のご支援，ご愛顧の賜と存じております．あらためてこの場をかりて心より厚く御礼を申し上げます．

終わりに際して，これまで社業のためよく精励してくださった社員諸氏をはじめ，またこの社史編纂に直接参画して，資料の整理，原稿の作製など長期間続けていただいた，竹内正隆，南條友子，若井　寛，橋本　武，飯島陽一の各氏，ならびに諸資料を参照させてくださった(株)出版ニュース社の鈴木徹造氏，および出版界，取次店，小売書店の各位に対して，衷心より御礼を申し上げます．

昭和61年 6 月

南 條 正 男

目　　次

序にかえて　　南條 正男

創立者　南條初五郎の
　生い立ちから創業まで ……4

社　史(＊＊＊社会・業界史) ……7

刊 行 年 表

凡　　例 ……43

大正 15 年～ ……46

昭和 11 年～ ……82

昭和 21 年～ ……127

昭和 31 年～ ……151

昭和 41 年～ ……232

昭和 51 年～ ……298

書 名 索 引 ……367

創立者　南條初五郎の生い立ちから創業まで

創業者　南條初五郎は，明治29年9月9日　南條延吉，同ハマの長男として，当時の東京市下谷区上野南大門町12番地（現在:台東区上野3丁目）で生まれた．この時の日本は，先年（明治27～28年の日清戦争）まで好況できた反動で，株式は暴落し，金融恐慌で工場等も閉鎖するところが多く，また諸々に労働争議が起こるなど，きわめて騒然とした不景気な年であった．

当時，父は山崎屋という酒屋を営んでいたが，この不況のあおりを受け店をたたんで，牛込区市ヶ谷にある秀英舎（現在の大日本印刷㈱市ヶ谷工場の前身）に勤めるようになった．それらが原因で，父は妻ハマと離婚したが，初五郎を愛でるあまり，若い身空でありながら父は終生後添をもらわなかった．その後の初五郎は，子どものいない父の叔母のツネにより，我が子のように慈しみ育まれた．

尋常小学校4年を卒えて，数え年の12歳で神田・神保町にある古本業・飯島書店（初代の店主は飯島善吉さんといった）に奉公することになった．当時の神保町界隈は，近年とは比ぶべくもないほど多くの古本店が軒を並べていた．中でもこの飯島書店は，とくに理学・工学の分野の図書を多く扱っており，南條は後年“この店での数年の勤めが非常に役に立った”と友人に語っている．この古本店での当時の店員仲間に，(故)栗田確也氏（栗田出版販売㈱の創立者）もいた．

この頃から仕事を覚えるにつれて南條は，飯島書店に勤務していながら，いつまでも人に使われていたのではウダツがあがらない，いつかはいままでの経験を元手に，自立して商売をやりたいと考えるようになり，貯えとて余りないまま，その機会を真剣に探り始めた．

南條は19歳になった．まずわずかな貯えの底をはたいて，神田錦町(現在の東京電機大学近く）に小さな露店の権利を得て古本店を開いた．世の中も第一次世界大戦景気が始まり，国家予算も巨額に膨張し，物価は高騰しつつある時だった．露店の古本業は一人ぐらいの糊口をしのぐのには充分であったが，店を開いていくばくもなく兵役に服することになり，千葉県習志野の騎隊に看護兵として入隊する．

この兵役中，同期に資産家として知られる人の二男がおり，互いに心を許す友として，将来の抱負などについて語り合うこともあった．これが機縁となって，除隊後の開業資金をこの資産家より借り受けることができた．当時の金額で500円であった．

南條は欣喜雀躍，除隊と同時に早稲田の鶴巻町59番地に，手頃な借家を見つけて古本業　泰林堂を開いた．ここでも飯島書店の経験がものをいって，早稲田大学の学生や教授の良い客筋をもつことができた．家賃は10円で狭い店ではあったが，一人で店番をしていると古本の仕入れや市場へもゆくことができず，それなりに手不足をかこっていた．

その折，近所で親しくしていた横井市之助さんの紹介で，この人の姪の横井くら（愛知県海部郡八開村鵜多須の横井庄之助の長女）と見合いをし，神楽坂の神社でささやかな結婚式を挙げる（大正9年1月14日）．ここでようやく父と，父の叔母と，妻との四人の水入らずで平穏な生活がはじまり，妻もよく働き，留守番を立派に果たし，学生や先生方の評判も非常に良く，古本の売買にも結構目が利くまでになった．ところが好事魔多しという言葉通り，南條はこれまでの昼夜を分かたず働いた無理がたたって，肺尖カタルを患うようになった．折角，商売が軌道に乗りかけた矢先での不幸である．当時の肺尖カタルは，肺結核の第一期といわれて世間からはうとんじられ，医学的にも難病視されていたものであった．

そこへ，大正12年9月1日午前11時58分関東一円を襲った大地震で，店の建物は堅固ではあったが，本の重みで壁は落ち箪笥は倒れ，棚は本と一緒に倒壊して辺りに散乱した．“当時2才になる長女の照子を抱きかかえて，生きた心地はしなかった”と後年くらは語っている．この大地震はちょうど昼食時であったため，火の気が多く，各所で火災が発生し，東京は山の手方面を除く中心地区と下町は，全部といっていいほどの焼野原となった．

焼失はまぬがれたものの，その後は店の商売もあまりぱっとしなかったが，肺尖カタルのほうは，北里研究所への通院加療が効あってか快方に向かった．

南條はこの頃より，単なる金儲けとしての古本業に飽き足らなくなり，さらに積極的に社会をリードし，世に貢献できる仕事はないかと日夜考え抜いた末，自らの手で出版を始めることを思い立った．

出版業は，一流の学者や先人の立派な思想や研究業績を，長く後世に伝えることのできる文化的事業として，また終生の仕事とするに足るものと考えた．そう思うと彼の性格から矢も楯もたまらず，早速出版業への転身を決め，行動を起こした．

まず新しい事業，出版業を始めるには相応の資金が要る．そこで住居を兼ねた借家の泰林堂をたたみ，返してもらった敷金と古本の処分代金を元手に，出版業への第一歩を踏み出した．

当時，出版社は主として神田に集中していた．そこで手はじめに神田で適当な場所はないかと探していたところ，やはり早稲田で古本業を営

んでいた森さんというかつての同業者から，一緒にやろうという申し出があり，さらに早稲田大学の学生の永田勇造さんを加えて，三人の経営で共立社をスタートした．始めてはみたものの三人とも出版については何の経験もなく，まったくの素人のため見事に失敗した．大きな借財を抱えて三人は鳩首協議したが，起死回生の名案も浮かばぬまま結局は解散に追い込まれることとなった．

南條は，三人で創った共立社という名前に非常な愛着をもち，その社名（看板）を引き継ぐため，一人で借金全部を背負い出直すことにした．店を閉めることによって何処かに引っ越さなくてはならなくなった．手頃な店がないかと探していたところ，神田西紅梅町２－４（現在の国電お茶の水駅沿いの商店街）にちょうど良い店が見つかった．いよいよ再出発だと南條は心機一転，決意も新たに共立社の看板を掲げた．

この日をもって共立出版株式会社の創立記念日としている．今より遡る 60 年前の大正 15 年 6 月 22 日であった．

社　　史

（社会·業界史）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正 15 (1926)

南條は日頃から，一つの事業はそう容易に成るものではない，七転び八起きの精神で頑張らなくてはだめだ．やってやってやり抜くことによって，かならず光明が訪れると，自分に言い聞かせながら再出発を誓った．

この時の書肆共立社は神田錦町 3-25 番地にあった．今までの共同経営者だった二人は去り，自分一人で今までの全借財を抱えて店じまいをしたので，どこか適当な場所を探して引っ越さなくてはならなかった．ちょうど神田区西紅梅町（現在の国電お茶の水駅沿いの商店街）に手頃な借家がみつかった．

独立して果たしてうまくいくかどうか，いくばくの不安はあったが，自ら決心したからにはどんな困難なことがあろうとも，それに打ち克って立派な出版社を築こうと，将来への大きな夢と期待に心躍らせながら，この場所に共立社を創立することとした．（この時，南條は 29 歳であった）

＊　＊　＊

大正の末期から昭和の初めにかけて，第一次大戦後の恐慌と，関東大震災の痛手から抜け切れず，わが国内の経済は不況のドン底にあった．

11 月，改造社が「現代日本文学全集」全 37 巻を，申込金 1 円で予約募集をはじめたが，これが予約数 35 万部に達する未曽有の好成績をおさめた．1 冊 1 円であることから，当時市内 1 円均一の“円タク”にならって円本と呼ばれ，円本時代の幕明けをつくった．

昭和 2 (1927)

出版界に身を投じて，すでに緒戦で惨めな失敗を経験している南條は，今までのようにどこでも出版している本や，単に名の売れているというだけでの著者ではだめだと考え，何か新しい出版物はないものだろうかと想を練っていた．

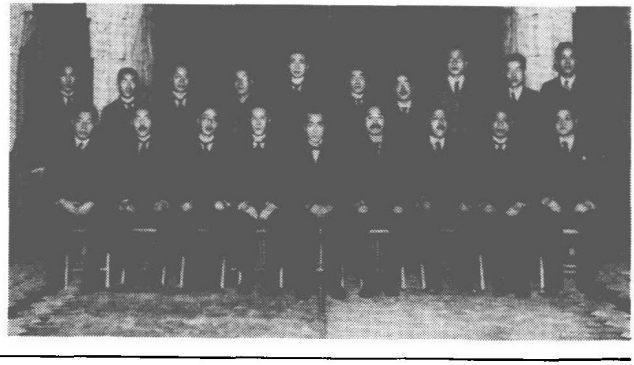
その揚句，考えついたのが数学書だった．もちろん，数学の本はすでに多く出版されてはいたが，反面ちょっと目ぼしい本となるとほとんどが翻訳書だった．なんとか日本人の書いた数学書が発行できないものかと考えるにいたった．

たまたま東京帝国大学の数学科の教授，坂井英太郎博士にこの話をしたところ，はじめは名前も聞いたことのない出版社の話だったので聞き流していた博士も，最後はこのプランにたいへん乗り気になった．それからは熱心に具体的な計画をすすめていただき，また販売面での配慮から先生の推薦で，国枝元治博士（東京文理科大学）の協力を仰ぐことができた．

（1 月 20 日　長男　安昭誕生）

＊　＊　＊

昨年よりひき続いて，大手出版社が挙って



「輓近高等数学講座」編集委員会
（帝国ホテルに於いて）

全集物を発行しはじめ，いわゆる円本ブームが到来した．

当時の全集物の刊行は予約出版法によって，内務省に定価10円未満のものは500円，10円以上のものになると1,000円の保証金を納めなければ予約募集ができなかった．

小型本の叢書「岩波文庫」が発刊された（夏目漱石の“こころ”ほか23点）．

昭和 3 (1928)

「輓近高等数学講座」の計画は，坂井英太郎博士と国枝元治博士との協同企画により骨子ができ，執筆者も当時の数学界の大家への依頼もすみ，企画段階は非常に順調に運び，いよいよ制作の段階となった．

南條には，小さな一冊単位の出版をする程度の金はあったが，毎月発行の予約出版となるとそれ相当な資金が必要になる．苦慮した南條はこのことを坂井博士にそれとなく正直に話した．

博士はちょっとビックリしたような顔をされたが，“それなら僕の知人のお金持ちで，こういう文化的な仕事に対して非常に理解のある人を紹介してあげる”といって，当時の経済界に名を馳せていた大倉喜七郎男爵を紹介してくださった．

男爵は坂井英太郎博士の教え子でもあり，とくに数学という学問に対する深い関心を寄せており，南條の借金申し込みを即座に快く引き受けてくれた．

＊　＊　＊

9月，日本初の電送写真が，大阪毎日新聞の紙面を飾った．

円本時代はなお続き，廉価版のマスプロ物から，その他の出版物と雑誌も巻き込んで業界は概して好況だった．

これは印刷・製本などの関連産業の技術改良と合理化によるコスト・ダウンが，大衆への普及を促したこと．いま一つにはこのころの委託販売制度がさらに販売成果を押し上げたともいえよう．

昭和 4 (1929)

前年発表した，「輓近高等数学講座」はみごとな成功をおさめることができた．つぎは物理・化学を発行することとした．当時東北大学には化学系と物理系の優秀な教授が数多くいた．そのうちの箕作新六博士の知遇を得て物理・化学の講座を計画した．

おりしも岩波書店では，岩波講座「物理学および化学」全24巻の計画が時を同じくしてすすんでおり，これと完全にかち合う結果となってしまった．一方はすでに名著出版の誉れ高い岩波書店であり，片方はまだ創業間もない共立社では，製作，宣伝，販売面で大きな差があり，これは惨めな結果に終わってしまった．

しかし岩波書店は完全予約制であり，完結後も分冊販売は行なわない営業方針から，読者は自分の専門分野だけの分冊を買

「輓近高等数学講座」
（朝日新聞：広告）

うということができない．共立社は完結後，各項目をバラしてそれぞれの単行本にした．これが非常な好評を得て，この売れ行きは講座の不振を充分に補った．
（2月21日　二男　正男誕生）

＊　＊　＊

このころより，すさまじいまでの円本ブームは下火となり，業界は行き詰まりをきたしつつあった．

過剰供給から各小売店での出先在庫が溢れ，返品につぐ返品で，出版社の倉庫はうず高く残本が積み上げられるようになった．反面，専門書出版社はそれなりに相当な成績を上げ，小部数発行の図書が多くなった．

昭和 5 (1930)

「輓近高等数学講座」が成功裡に完結したことによって，さらにこの読者をフォローすることを考え，「続 輓近高等数学講座」を刊行することとした．

南條は，“一国の文明度を計るバロメーターは，その国民の数学の知識水準の差にある．当時フランスが戦勝一等国としてよくその国威を保持していたのは，同国民の数学の知識によるものだ．”という言葉をある教授から聞き，まさにこれだと思った．わが国もこれから，科学，工業の発展に伴って，模倣時代から日本独自の創造時代にはいろうとしている時，科学・工業の発展の基礎分野をささえるものは，まず数学をおいてないと思いつき，立て続けに数学講座の発行を考えた．

しかしいずれの数学講座も，昭和3年に発行した「輓近高等数学講座」のように，販売面からみても画期的な売れ行きとはいえなかった．

＊　＊　＊

好況時代の反動で，円本出版社などは儲けた利益を全部投げ出しても足りず，倒産するところが相次いだ．

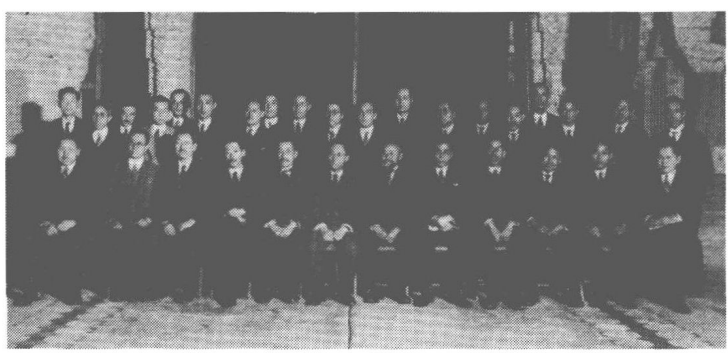
倒産の原因は，購買力の読みの甘さからくる過剰生産と，無理な低定価の設定にあった．いま一つは，言論統制の弾圧強化がすすみ，発売禁止の出版物が多かったことも原因として挙げることができよう．

昭和 6 (1931)

社もこのころから少しく出版社としての基盤も整い，いままでの借金を返済できるまでに業績も安定してきた．

5年間住みついた社も手狭になったこともあって，折角住み馴れた場所でもあり，界隈に適当な借家はないかとさがしていたところ，紅梅町からさほど遠くない甲賀町に，家賃も大きさも手頃な借家がみつかったので移転することとした．

いままでのところはまだ発行点数も少なく，在庫量も大したことはないのでそう広い倉庫でなくてもよいが，今後の飛躍を予測するともっと大きな店が欲しかった．



「輓近高等物理・化学講座」編集委員会
（帝国ホテルに於いて）

このころになると「輓近高等物理・化学講座」の完結後に，前年にも記したように分冊発行したもののうち，時代の需要にマッチした専門分野の本が好評を得て，セットでの売れ行き不振を，カバーできるほど需要が多かった．

＊　＊　＊

前年に続いて業界は近来にない不振，不況をきわめた一年といえよう．

その反面，財政，経済，法律などの社会科学関係から自然科学分野の書籍が，活発にまた意慾的に刊行された．このことは，マスプロ，マスセールに対して，地味ながら堅実性の高い出版で，息長く読者を確保しようとする，出版社サイドへの意識革命を促したともいえる．

昭和 7 (1932)

社は，日本の科学や工業の発展にはまず数学知識が必要と思い，矢継早やに数学講座の発行に心がけてきた反面，数学のつぎに何を計画すべきかも自問自答した．

いま，国家的レベルで考えてみると，資源の豊富な満洲が独立し，これらを含めてわが国の資源不足を解決できれば，日本の工業の将来は，あらゆる方面において飛躍的に伸びることが可能だ．そのためにはいままでのように経験だけに頼っていては，旧套より一歩も抜け出せない．

工業の革新的な発展を望むならば，それぞれ科学的根拠をもつ実験データと，研究調査にささえられた学問の推進が必須条件である．この実験に基づいて確立された裏づけが正確な知識として普及し，科学の進歩と工業の発展につながる捷径と考え，「実験化学講座」「実験工学講座」等の講座を計画しはじめた．

これらの講座は，当時の業界ではユニークな企画であった．

＊　＊　＊

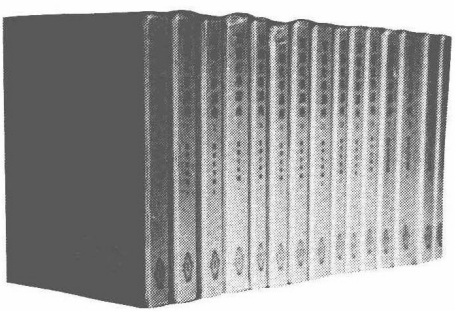
浜口内閣の緊縮政策，官公吏の減俸等の理由で，一般的な購買力の低下した年といえる．

しかし出版物に関しては，外には満洲国の建国があり，内には科学・技術振興への旺盛な知識慾が生じて，これらの関係者に対する需要は芽生えつつあったといえよう．

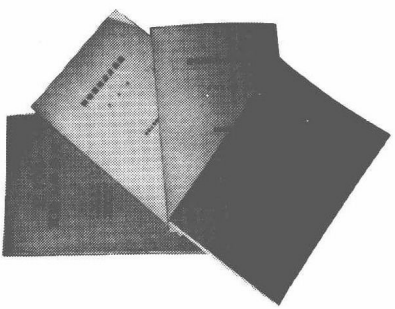
昭和 8 (1933)

紅梅町から南甲賀町（駿河台3丁目）に移転し，書肆共立社の看板を堂々と掲げることができた．社の経営はかならずしも楽ではなかったが，出版社として一応の基礎は固まったといえる．

ここの家主は南條に非常に好意的で，家賃も割合に安く借りることができ，また大家さん自身が住んでいた，田園調布の立派な住居を自由に使いなさいといって貸してもくれた．さらに住居の隣りの空地 300 坪ほども借り受けることができ，そこに倉庫としての簡易な建物をつくった．



「実験化学講座」



「実験工学講座」

このころから講座の数も増えて，巻数によっては残本数に斑（むら）があり保管に困ることが多く，近々倉庫の心配をしなくてはならないと思案していた矢先だけに，店舗と社長用の住居，そして倉庫と一カ所にすべてがそろい，たいへん好都合に利用することができた．

＊　＊　＊

この年は，日本精神を鼓舞啓発するための，国粋主義的な思想や文化に関する単行本が陸続として刊行された．また権威ある講座，全集の予約出版物が円本時代の反動として歓迎されてきた．

出版物の検閲制度もさらに強化され，内務省は左右両翼出版物の徹底的な取締りのための検閲制度の改革を行なった．

昭和 9　(1934)

社は，近代科学の先端をゆくものは何かを探りながら，出版物に生かすことのできる学問分野をつねに模索するなど，他社に先駆ける斬新な企画を見いだすために，日夜腐心していた．

このころ南條が住居を移した田園調布の近所におられた，千葉茂太郎博士と親しくご交際することができた．博士は東京電気株式会社（現在の東京芝浦電気㈱）に勤めておられ，折柄，社で発行してきた「無線工学講座」が9月に完結するのを機会に，つぎの計画で，何か適当なものがないかと相談した．

博士は「無線工学講座」を発行した折りでもあり，同じ分野に続くものとして，この方面の雑誌をやってはどうかとすすめられた．南條は雑誌の発行は初めてでもあり一抹の不安はあったが，思い切って発行することとした．それが雑誌「DEMPA」（電波）である．

＊　＊　＊

産業界の振興は同時に，教育，文化の普及進展を促し，これが業界にも好影響となって反映してきた．

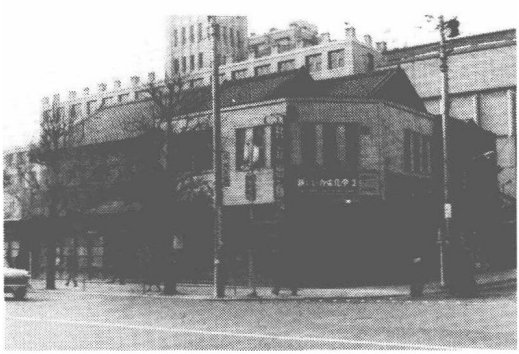
全集，講座の予約出版物も活況を呈してくると同時に，宗教物とか，技術者向けの書物もまた素晴らしい売れ行きをみせ，出版界の前途も明るさを増してきたといえよう．

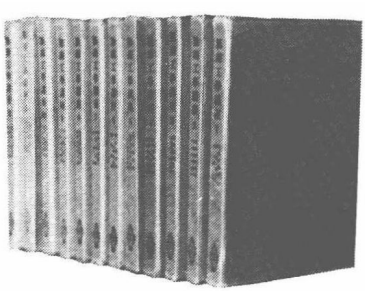
昭和 10　(1935)

この年の南條は39歳であった．企画行動力は旺盛であり，出版社としての基礎も完成されつつあった．

無類の本好きと創意に加えて，目新しいものに飛びつく気性は，年とともに積極性を増すばかりだった．大学をあちこち飛び回って，新しい講義をする教室ができると，すぐその講義をもとに講座を計画することがたびたびであった．

この年になると工業，とくに産業界の動きも活発となり，伝統のある大手出版社は情報の収集も早く，社が計画を手がけはじ





駿河台旧社屋（昭和35年頃）
「無線工学講座」

めるころには，これらの出版社はすでに発行段階まですすんでいるなど，企画が重複するケースがしばしばだった．

競合する企画は需要の面で読者を分けることになり，学術や産業界への貢献は大だったが，経営サイドからみるとかならずしも成功したということはできなかった．ただ著者を発掘し獲得するという面では非常に有用であった．

＊　＊　＊

業界もここへきて，出版点数は増えるが，部数は減少するという反比例的現象を生じてきた．

普通でも1,000部以下の出版物が多く，中には300部，400部という小部数で採算をとる特殊出版さえ続出した．

これは年々増え続ける業者が，互いに安易な類似企画，模倣出版に流れることから，結局は，購買力が半減するという出版物が多くなった．

昭和 11 (1936)

この年「内燃機関工学講座」を刊行することになった．この著者の大半が，駒場にある東京大学の航空研究所を中心に勤務する若手教授陣であった．

ところが時局柄，ほとんどの人が研究に追われていて執筆するにも時間がなく，原稿は遅々として進まず，完結するまでの労苦は筆舌につくせぬものがあった．

昨年施行された汽缶取締令に基づいて多年懸案になっていた汽缶士の検定試験制度が確立された．これは汽缶士の職務内容が保安上，また燃料経済上いかに重要であるかが裏書きされたわけである．

汽缶取締令が施行されて1年経過したが，試験科目に関する参考書は多いが，汽缶士のための解説書が少ないため，社では内務省，警視庁のこの方面の技術者に，すぐに現場で役立つ汽缶士の実務書の執筆を依頼した．

＊　＊　＊

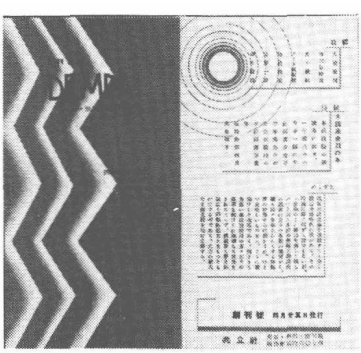
帝都において2・26事件が突発し，戒厳令が布告される．

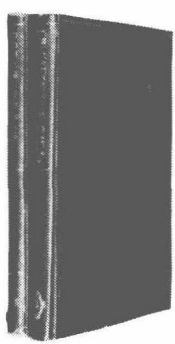
この事件を機に，出版物も教育，修養方面の書より，経済，産業，技術方面のものが著しく刊行された年であった．このことは民族飛躍の途次にあるという時代背景が，敏感に業界に反映したともいえる．

昭和 12 (1937)

日華事変が拡大されるに伴って，若い技術者，中堅の技士の不足が目立つようになってきた．

生産会社は工員の募集に大わらわになり，工業学校においても，工学技術の修学内容をあらためた．また戦線の拡大に伴った速修的な技術書の需要が頓に増えつつあった．これらに対応するため社では，工業学校用の機械，電気，土木，建築等の教科





雑誌“DEMPA”（内容見本）
「汽缶士講座」

書の計画をすすめることとした．

会社としての基礎も徐々に固まり，社員が十数人と増えてきたので，いままでの南條個人の経営形態を法人化することとし，資本金五萬円の合資会社 共立社に組織を変更することとした．

この年あたりから用紙は不足，高騰し，インキ，製本材料等もすべて不足気味となり，新刊発行はもちろん，重版計画なども量的に絞らなければならなくなってきた．

＊　＊　＊

7月7日，蘆溝橋の銃声一発から日支事変が勃発する．

戦況の好展開から人心も落ち着き，読書欲（知識）はたちまちに復活して，国民一般は緊張裡にもその精神的糧を，書籍と雑誌に求めはじめた．出版物の種類によってバラつきはあったが，全般的には比較的良好な売れ行きを示した．

昭和 13　(1938)

この年，仁科芳雄博士編集による「量子物理学」の刊行を発表した．

仁科博士は，昭和3年にコペンハーゲンのボーアの研究所から帰国し，当時，大学の講座になかった原子物理学の研究を理化学研究所ではじめたが，博士自身は工学博士であった．当時の研究室には幾多の俊秀が集い，朝永振一郎，湯川秀樹両博士をはじめ，後年，全国の大学や会社の研究所などで優秀な業績を残した人が多数いた．

博士は事変中にかかわらず，量子物理学は自然界の認識をきわめ，科学の基礎を培うため，斯学の充分な咀嚼と体得が，新しい物理学飛躍へのステップでもあり，これがかならずや将来の科学，産業発展への道を拓くだろうといわれた．

博士の話では，読者対象はせいぜい 800 人ぐらいのものだといわれたが，南條はこのシリーズの発行を決断した．

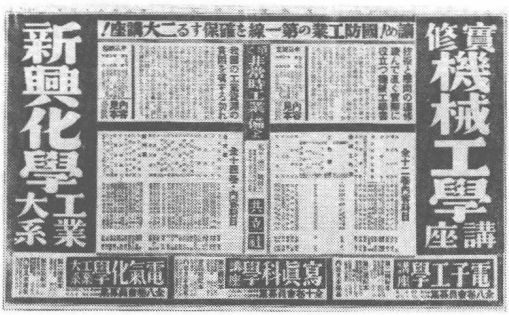
＊　＊　＊

戦火の拡大につれ，国民生活も戦時色一色に染まりつつあった．国家総動員法が公布され，国民徴用令など，国家統制は厳しさを加える一方であった．

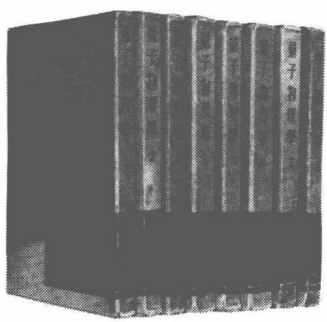
9月には商工省より物資調整の名のもとに，雑誌用紙の供給を，実績の2割減にすると通告してきた．これに対して東京出版協会の生産委員会は，用紙節約と出版業者の自衛対策として，買切制度を全国書店に呼びかけるとともに，業界には書籍の装本はなるべく並製にするよう要望した．

昭和 14　(1939)

社の出版物も着々と発行点数が増えてきた．とくにこれといったヒット本はなかったが，戦時体制に不可欠の産業を間接的にささえる機械，電気や，新興化学工業方面の本とか，また当時とくに注目されはじめた，合成繊維や人工による化学製品類に関



朝日新聞：広告


「量子物理学」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com